

妻で娘でハートボイルドで

よこば の一

白い壁。窓の外から聞こえる日暮しの声。

僕の妻であり、風前の灯のような命を持つ義父の娘であり、この病院の女医である彼女は、一体どこへ行ってしまったのであろうか。

僕の前には、滅多に顔を合わせることもなかった義父が危篤状態でよこたわり。

僕の後ろには、この場にはいない妻への非難を小声で話している、妻の親戚が一握り。「やっぱりお医者様は冷静ね。自分の父親がもう危ないっていつの間に、顔も出さないわ」「仲悪かったみたいよ。ほら、この人ったら酒とタバコと博打のサイクルしかなかったじゃない。お母さんが亡くなってからずいぶんと苦労したみたいよ」「

僕はひたすら何も聞こえない振りをするしかなかった。

ふと、病室のドアの方で物音がし、僕は安堵のため息とともにそちらを見た。

「暑い部屋ねえ。扇風機持ってきて正解」

とたんに病室が騒がしくなり、日暮しの声が途絶えた。

妻は騒々しい音を立てて、両手に抱えていた荷物を置いた。

扇風機。脚立。コンビニの袋。

扇風機をつける騒々しい物音で、昏睡状態であった義父が目を覚ましたようだ。

「ああ……いい風だ」

色を失い、からからに乾いた唇から声が漏れる。

妻はさらに、持ってきた脚立に上り、天井のスプリンクラーに手を伸ばした。

「な、何してるの？」

親戚の声にも一切反応せず、額に汗をにじませ妻はスプリンクラーをはずした。

「お前は相変わらずだな」

かすれた声で義父が娘に話しかけている。

妻は虚ろな瞳を見返し、微笑みながらタバコを取り出し、おもむろに義父の人口呼吸機をはずし、タバコを啜えさせた。

それでもまだ、彼女の動きは止まらない。

自分もタバコを一本吸いながら、さらに袋からビールを出したのだ。

「ビールを飲むにはいい気温ね」

そう言いながらブルタブを起こし、そっと義父の口に、一口、また一口と黄金に輝く液体を口にながしてゆく。

「ああ、うまい」

煙と共に出て行ったのは、言葉と魂と、妻の涙だった。

再び日暮しが静かに鳴き始めた。